



水眼鏡をかけて行う青干し▶
(イラストは筆者)

町史

とっておきの話

287

只見 ぜんめえ物語 ②

—青干しぜんまい—

本格的な青干しぜんまいとは、太陽の日は一切当てず、ぜんまい小屋に設けられた炙りホド（火処）の上で、木を燃やしながらかその火力で乾燥させたぜんまいをいいます。一方、雨天が続いたときなど、やむなく一時的に炙りホドで乾燥させた場合は、天候が回復すると一齐に天日で干しました。このように、一日だけでも陽に当ててしまうとぜんまいは赤みを帯び、きれいな青干しぜんまいにはなりません。

青干しをするとき炙りホドにくべる薪は三尺ほどの長さに切ったものやヨキ（斧）で直径五、六寸ほどに割ったものを使っていました。また、薪づくりはぜんまい山の二、三か月前に雪の上で行います。いわば半生の薪です。よく乾燥した薪は燃えは良いのですが火力が弱くて作業が

はかどらないといえます。

ゆで上がったぜんまいは箆にあげて水気を切り、炙りホドに敷かれた竹簀子たけすのこの上にあけられます。あけるとすぐさま、熱々のぜんまいを素手で広げては集め、そしてひっくり返すという作業を何回も繰り返します。ぜんまいの中に指を入れたときの感じは、まるで、もち米を蒸籠で蒸かしているとき、その中に入れたのと同じだといえます。とにかく熱い。慣れないうちは指が火ぶくれになってしまいませぬ。「今にして思えば、あんなことよくできたものだ。不思議に思える」と馬場正毅さんは言っていました。また、茹で上がったばかりのぜんまいをすぐに炙りホドで炙ると、想像以上に早く乾燥できるそうです。二時間ほど経過したところで簀子の上のぜんまいを取り上げ、筵むしろの上

に広げて息を抜きます。これで第一回目が終わります。

翌日、翌々日も同じ作業をそれぞれ一時間ずつ繰り返します。近くに水を張った桶を置いて火の回りが強くなりそうなきには、すかさず炙りホドに水を打ちます。立ちのぼる煙と水蒸気で目を開いているのがつくらくなりますが、火力が高過ぎたりひっくり返す作業が遅れたりすると、「ぜんまいがはじける」といいます。ぜんまいの皮が破れて中のエキスが傷口からしみ出してしまうのです。こうなると商品価値がなくなってしまうので火加減にはかなり気を使います。

ぜんまい採集が終わり山を下りるというころ、作りためた青干しの仕上げが行われます。ホドの火を弱火にしてそれらをも一度干し上げます。すると、それまでしななと柔らかかったぜんまいが天干しに近くなります。そして、ぜんまいの表面に細かな皺しわ模様が現れてきます。これを「縮ちぢ細こ皺」と呼んでいます。この縮細皺はよいぜんまいの証あかしと言われています。

鈴木 克彦
すずき かつひこ

蒲生の馬場正毅さんは泊まり山でぜんまい採りを行った経験もありましたが、子どもころ、親と一緒に泊まり山に行くと、青干しぜんまい作りをしている光景は日常的によく目にしていました。なかでも印象深い記憶として、ぜんまい小屋の中に設けられた炙りホドでおばちゃんの水眼鏡（みずめがね）をかけ、片足を竹簀子の端に上げてぜんまい干しをしている姿がありました。妻の八重子さん（昭和一〇年生まれ）も一七歳のころ、煙がもうもうと立ち上る山小屋で足袋をはいた片方の足を竹簀子の端に置き、顔をそむけたまま踏ん張りながらぜんまいを干している親戚のおばちゃんの姿を今もはっきりと覚えているそうです。

本格的な青干しぜんまいは、鮮やかな緑色であることから京都方面においては高値で取引されたと聞きます。また、煙をたくさん浴びているのでぜんまいがカビにくいともいいます。しかし、製法がとてもしばいことから、本格的な青干しを行う人は少なかったようです。